

事

村井靜馬著

情
明
治
太
平
記

六編

下

へ遠14

2504

26-12



門へ遠14
2504
26-12

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許
明治太平記
全

東京書林
延壽堂發兌

明治太平記六編卷之二

東京 村井静馬著

伏見の役起りて後僅く二年間を経るも甲
野總の戦争より奥羽越且ツ蝦夷地の賊まで降伏平
復し及びつ忽ち王政を復せしむる萬機の制度舊格を
武新一一回府藩縣の三治とありしも後郡縣の制を改
定或ハ各國と交際を厚くしテ渠ガ學術を從事し百般
技藝漸々其功を奏するに至るも大の航海の術を

明治太平記六編下

長け海陸の兵備隨つて整ふ然らば始めの横濱まで電信
を設けたるさへ人挙つて奇とせしも東ハ陸奥の果より一々
西も肥前の長崎は渡り支那へ通づると斯る
便宜を得たるんま前古未曾有の事あるは郵便或ひは
鑛道と設けて四民の爲に便ありしむる今や開明の治世
よ方り肥前の國佐賀縣下は思ひ寄らざる騷乱起れり
原由を尋めると同縣の貫属士族等飽食空手の閑るる
は倦てや征韓攘夷封建の三論を起し是等の三派黨を分

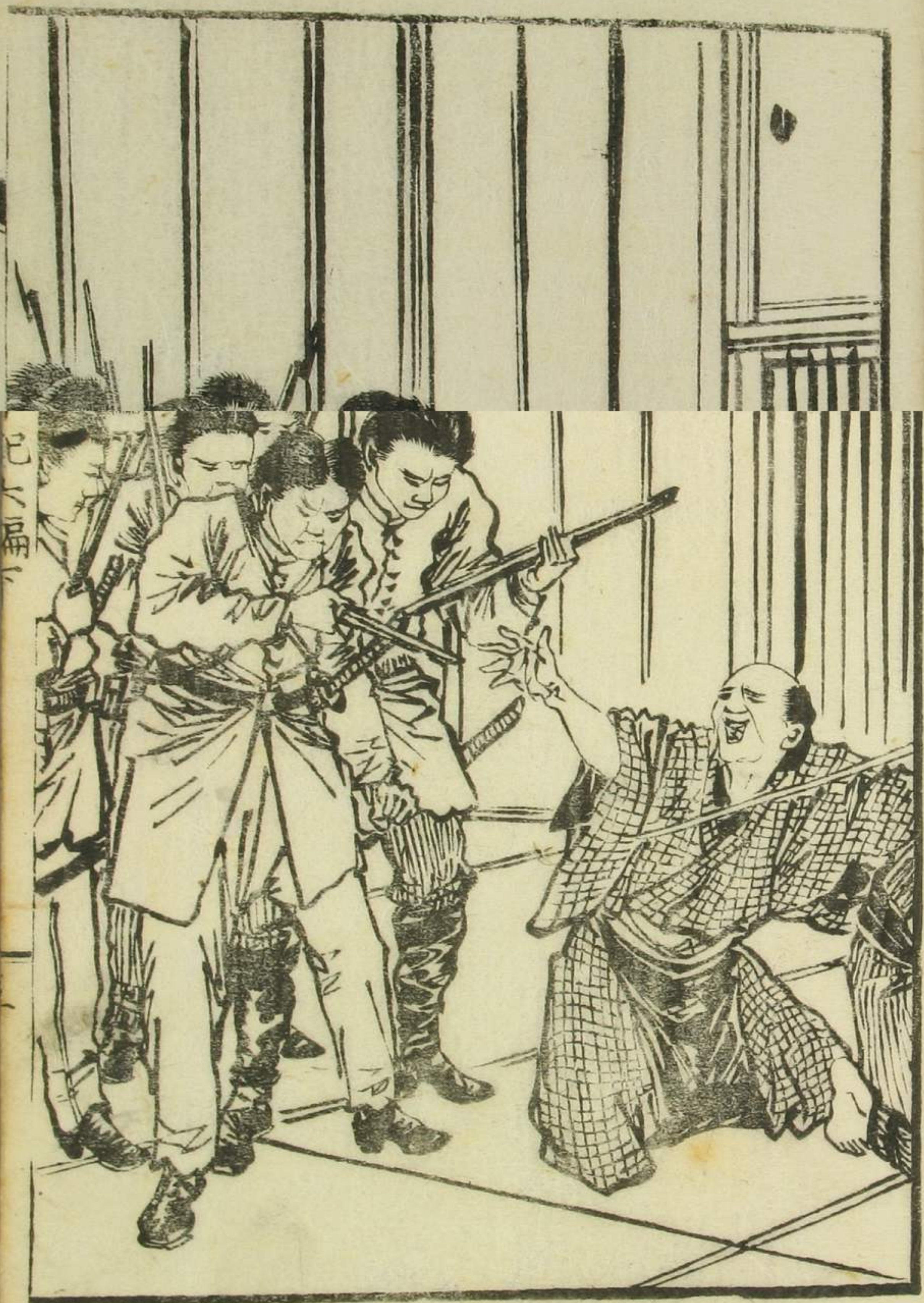
ちと學校或は寺院など集會し及び漸次は同
志多人數を擔らし専ら僻論を主張せり這も亦聊ら憂
國の至情は出る所ありんが其方向を誤るる又甚しと言ふべ
くれ介を其黨に與する者舊藩主の一族たる鍋島之丞
をたどめりて副島謙助木原義四郎等その他士族平民
に至り總計二千五百餘名遂に激論一定せしむるはあの
上ハ當縣廳を伐ぐ輩の議事所とふし公然と事を成
さんと彼黨の其中ある高木太郎外十二名を魁と縣

廳に遣はし参事森長義を通りかの征韓の論を
發し廳を議事所と借らんと請ふを森参事より之を
听て事の不可あり赴きと最懇ろ小説論をせども高木
等耳ふもかけぎて大に憤懣の色を露し森を罵り
辱しめり然れども長義は渠が疎暴に應むるとも益
なき事と思ひらん只穩當ある答として此日ハ故なく歸らせ
しが容易ありざる形勢也是等の旨を電信にて具さる
東京へ報知せり介はまゝ高木等ハ縣廳より立ち飯り

参事應接の赴き同志の者告たりしと遠く
朝聞を憚りそや種々評論し及びし山田平蔵中島
鼎蔵朝倉弾蔵の三名より書を縣廳に出し曰く
我輩高木太郎等も托し征韓籌策の議事所を
借用し及ばせしは渠等不圖参事對し不敬の辞を發
せし由承りて恐懼し堪む因て太郎以下の罪科を
我々三名も引受くべければ至當の所置と蒙りしと
是に於て高木等よりも謝罪の書面を出さしめられ

則ち縣の裁判官日あつて之を糾弾し高木以下官吏
 罵詈律山田以下不應為律處せり各々士族の
 故をもて贖罪金を出さむ是に至り暴徒等の大
 つよ不平と抱きて言ふやう我輩罵犯の謹んでその
 罪よ伏せんとせれど征韓の夏に至りる人民の義務
 ならば政府よ於て制まらざるの理なり是より弥
 憤激なり左右へさし置き軍資を募りて兵備を整
 と整ふべしとて既二月二日に至り豫て佐賀縣よ

出張せし小野組の為替會社へ激徒等多人數小銃
 を携へ或の佩刀をもちめりて突然と進入り征韓の
 軍資と名として強談及び一會社の老管手代
 等ハ恐怖の餘り狼狽して只一言の応接も及む
 散々よ逃走るも暴徒等縦きみ金庫を開
 きて二十万圓を掠奪なり其他縣下の豪家より
 又彼の征韓軍資と唱へる金米或る兵器の類ひと
 強奪すると勘うるに斯るして尚隣縣もも游説の



佐賀の暴徒
 野小の徒等
 組の會社
 と劇のほ



士を遣はし、専ら同志を擔ふは是が為、他の士族等も心を動かし、者多く、仍く佐賀の激徒等も始め、征韓攘夷封建と三黨に分ち、今ハ一派は合併して暴威を成し、震へるを、此旨當所の縣廳より屢々注進し、及び一々朝廷も苦慮在らせし、れ速く鎮静せんと、神奈川縣の權參事岩村高俊と喚ぶ、基高知縣の士族も九州の地理を委しく、殊よ人望あり、之を佐賀縣の權令に任す

急ぎ彼地へ差下り、抑佐賀の事の起るや深き仔細のあり、其故を奈何と言ふ、前參議江藤新平あり、者在職中、同列板垣副島以下の諸官負と俱し、曩は朝鮮我が使節に對し、最も不敬の舉止あり、問罪の師を遣はし、且ち民撰議院を設け、其の赴きと屢建言し、及ぶ、雖も岩倉右大臣歸朝の後、其其の不可あるは、朝議決定せし、江藤等が主張せし、兩説との不行せざる、甚が憤激

做みせるより病やまは托たくして職しやくを辞しし尚なほ東京とうきやうに滞どま在ざいせし
 が江藤えとうへ此こゝに終おひ已まべきの心底しんぞよりうざれば其その躬こゝろの故郷こきやうを
 が故ゆゑは佐賀さかの士族しぞくを煽動せんどうし渠等きらうが沸騰あつうの報知ほうちを聞き
 より直たださま佐賀さかを走下をさかし六尋むつじんで島義勇しまぎゆうある者ものも陽ひらに
 鎮撫ちんぶと唱なへつ齊いっしく佐賀さかを帰縣きけんして俱ともは彼黨かのうを合あ
 躰えんせしくは激徒げきとの暴勢ぼうせい盛んさかなり件の西氏さいしを推崇おしあ
 めく其群そのぐんの巨魁きょくわいと仰あやぎ此機このきに乗のりて縣廳けんていを迫せまりて
 事ことと挙げあげんと言いふ風聞ふうぶん隠かくさるゝに依よりて参事さんじ森

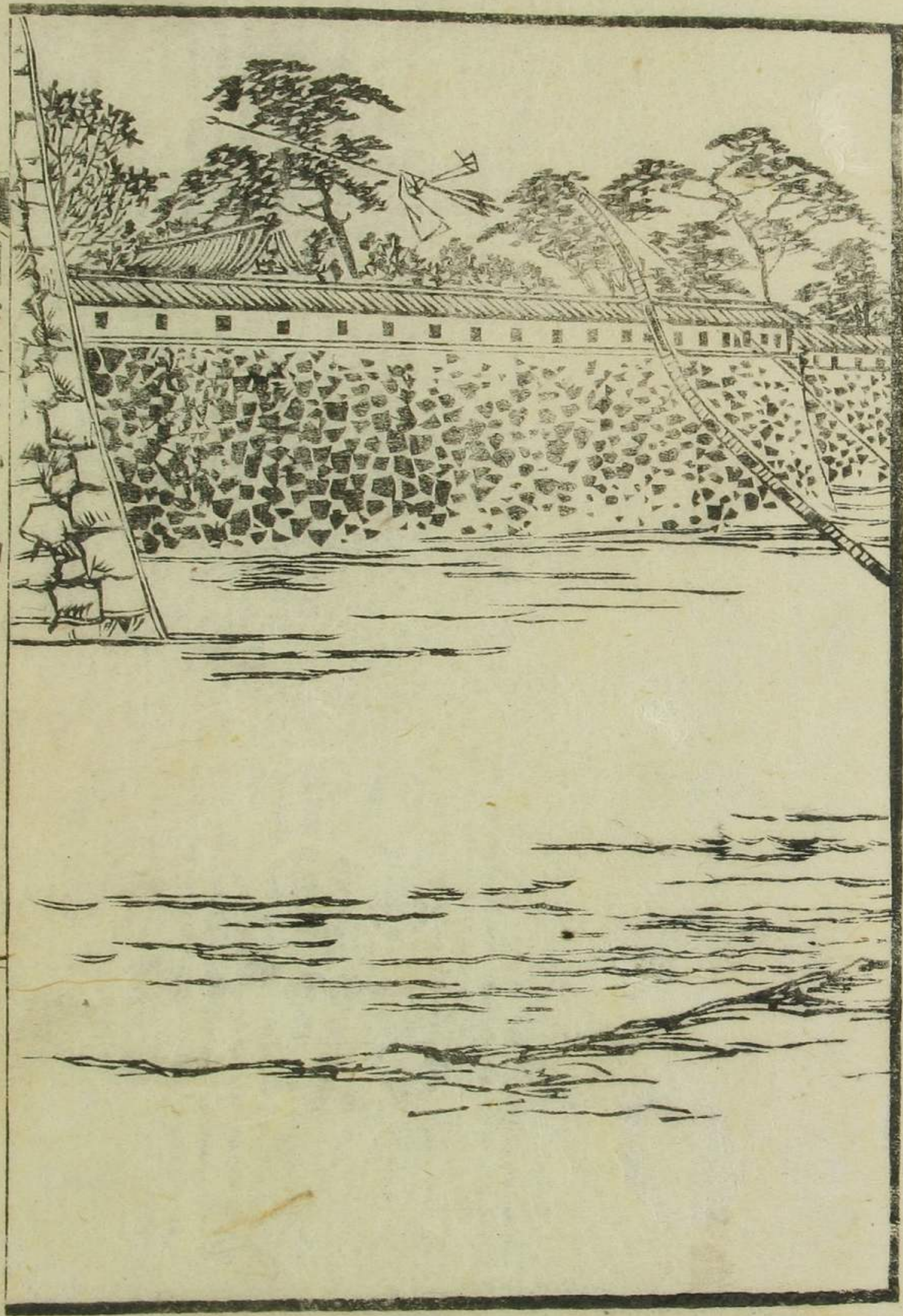
長義ちやうぎへ大おほに苦慮くりよする所ところより隣國りんこく三瀨縣さんせいけんに到いたり同
 縣けんの権参事けんさんじ塩谷某しんやふたがひと對面たいめんし及び應援おうえんの義ぎを相あ
 議ぎするは此地このちに兵備へいび十分じふぶんありねば兎角とくかくは岩村高俊いわむらたかうしゆんが
 下向げかうを半途たんとちうに出迎いへる事ことと議ぎするは如ごとくして直ただちし下
 の関せきに至いたるは折まり岩村高俊いわむらたかうしゆんの陸軍りくぐんの大尉だいう中村某なかつむらたなかと
 俱ともに熊本くまもとの鎮臺兵ちんたいへい二中队にちゆうたいを引卒ひんそつし此地このちに來きるふ出會い
 しく再び評議ひやうぎし及およべりし彼輩かのはい烏合うがうの徒とありとも其勢そのせい三
 千ちに近ちかしとわれ我われが二中队にちゆうたいの兵へいを捕控とらひせんといひかへ

べりれバ援兵多くし
縣に赴きて兵を
より佐賀縣へ三日
の士族の暴挙
の勢ひなりと傳
ざるより内務卿
省の官負之べ更
官兵隊を之に陸

慥ふまじと森参事ハ
と出行けハ岩村ハ兵を
十四日入城せり是より先
りて近縣の士族等
報昼夜を判とざるを
久保利通は卒く西行
り其他司法の官負等乃
行なりとも蒸氣北海

日十四横濱と出
津等の面々も
備へく是も佐賀へ
の縣廳に入ら
館に使節を遣
べきの旨最嚴重
陽へ恭順の体
城中の廳に遣り

り次の日まゝ海軍の
の兵士と率つる大砲
進發を介程は権令岩村
否や直ち暴徒の屯集
征韓黨の巨魁の者
達するを士族等大
りとなり巨魁と號し
渠等が糾弾を受る間



月台太平記六編



箭文飛やぶと一
 て前山暴徒さきやまぼうと
 等の襲撃をしげきを
 城中じやうちゆうに忠告ちゆうこす

月台太平記六編下

準備を整へ翌十五日の夜半と期し城を囲むの議を決せり
茲に當縣士族の中は前山精一郎とる人者らう此人博學
多才あれども假ふも自負の色と見ゆ常は謙讓人よ
下り徳望世よ秀でたう既に奥羽の戦争中を大の賊
軍と捕挫ぎて勲功と露したる文武兼備の英傑あるよぞ
勤王の志氣最も厚く余は這回同縣士族の暴動の所
為を深く歎き辞を尽し理と責て百方説諭するよと
雖も更は心腹做ざる故此上の力なりとて馳て家族等を

遠く退げ同盟の正義士甲しと俱に鎮撫屯所宗龍寺に
在て専ら縣廳を保護せしう今宵暴徒等佐賀城を
襲撃するの愛と所知り箭文を以て城中へ潜りふとれと
告知せり余は權令岩村氏へ暴徒の巨魁を召出さし此
輩と説諭し成るべく兵器を用ひて鎮撫をさんと尽
力せし前山が箭文は依りて今宵激徒の襲撃を
其形勢を知り至り斯く速く兵端を開くべしと
思はざるゆゑ軍備全く整はねども彼熊本の鎮臺兵

諸寄方の非なり及

是奈更の再小持俱

明治六年平諒六終

十

ちがふに分配するも頭は防禦の備へをみ敵の
まら候俟に其夜果し其賊の大軍城の四
を推捕圍と大小砲を打らると雨の注ぐが如く
れども岩村権令臆する躰なく丈の知れざる鳥合
車一挙よあま撃散らせと城門を開きと発砲
し少く敵と傷つらと目よ餘りたる大軍は漸
み新手と操替々々昼夜を判らば攻むる更三日三夜よ
し城兵強あらざるよゆねと不意よ出する

ふれば龍城僅ら三日ふして米塩弾薬尽されば
何をも為さずあて因て権令岩村小も今ハを
逃られれば死を決するの時なりれども身と潔くせし
よて我が職掌と竭ふらるる一旦此場を所抜く
本と因らる如いなりと脱く解城の令を傳へ大属
某権中属中島某は廳中所有の金貨を分け
追手の城門をかき開き群がる中山撃て出たる時

月台大正記六編

二

猛虎の暴たる如く四方八面は當りつ辛く活路を斫り
 開き岩村ハ単騎ハ一博多とさう走るも自餘の縣官
 兵士等も皆散々逃去りたる并ガ中ハ大属渥見某と
 十五等出仕某ある者僅クハ二名踏止まりて廳中ハ在
 る所の簿籍紀錄を守護する寸歩も其場と去らざり
 一ハ事ハ臨んて動ぜざる強膽實ハ感賞せん又殊更ハ
 憫むべきハ彼の中島権中属あり権令よりの命ハ從ハ
 金貨若干と携へつ潛り小枝路ハ分入りて虎口を

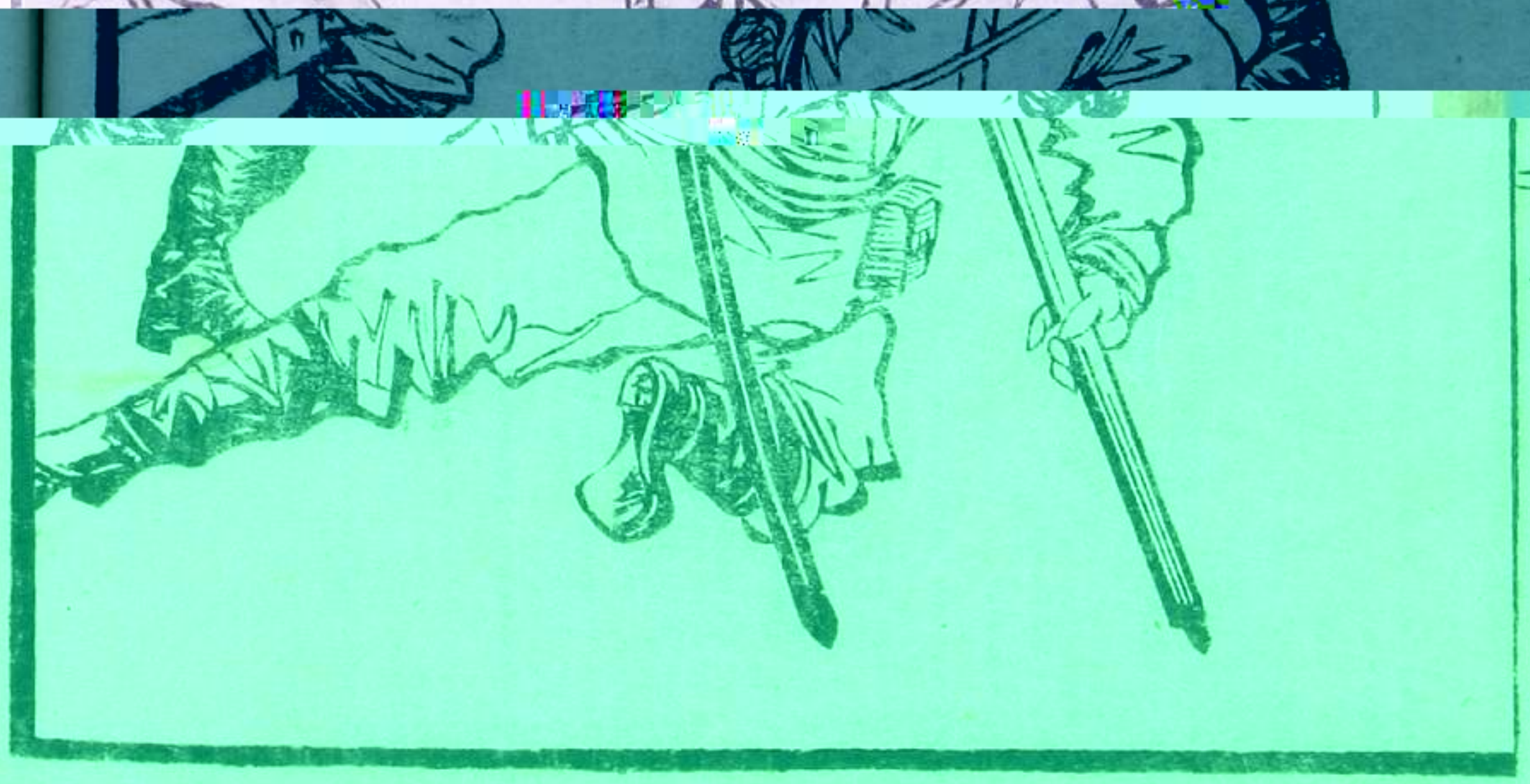
遁とんとする折々賊兵多人數追逼りて前後より
 之圍りて久須更ハ挑む戦ふと雖も單身少て争ふ
 多勢ハ敵まる事と得ん遂ハ擒よせりて一ハ金貨を
 携へたるとゆへ官金掠奪の誣名と得て賊手ハ斬首せ
 らせ一ハ最悼キ一ハき更よるん介程ハ暴徒等ハ一時勢
 ひハ兼トワ佐賀の縣令と追走らせ遂ハ其城と乗り取
 り一ハ暴威まゝ盛んあるふぞ此機會と失るべし
 近国の士族とて我ガ黨ハ荷擔さしめ更と成人と

月台大正巴六編



賊中ノ捕
稠られて
中島非命
ノ死也

日...



謀りつ九州の裡ハ言ふも更あり四国及び中国までも説
 客と遣ハ一々鼓舞をせり更大方ありねば為人心動揺せし
 是より先前山精一郎ハ箭文をのり暴徒等が機密を
 城中に通ゼしと其甲斐もなく數日ふして佐賀城落
 居ふ及び一々最も遺憾に堪ざと雖も其躬は同盟せし
 者ハ僅く數名に過ぎれば又施すべき術なき此輩を
 相俱して三潯縣下柳川に退き渠等ハ當所は残し
 置て夫より前山單身を直ち肥後の熊本のり

鎮臺兵を驅催し自ら之が先登し佐賀に入らんと
 為たりし其臺兵の中は加つ佐賀縣の士族百餘名
 あり是等の既は隊中を脱して賊と與せんの色有
 りしと前山疾くも其機を察し懇々説諭し及び
 大方に帰順させし内五名は肯せし遂は躬方を脱
 走せり然るも賊勢は強く熊本の鎮臺兵も一旦敗
 ると至りしと暴論説の届らざりし前山甚だ
 慙愧し遂は割腹為たりし最惜むべき義士

こゝに茲に長崎の
一が佐其の筆
暴徒等即今長
正懿と謀りて島
急募募俄
弱駭き不狼狽
よら暴社等
りと斥候使の者より

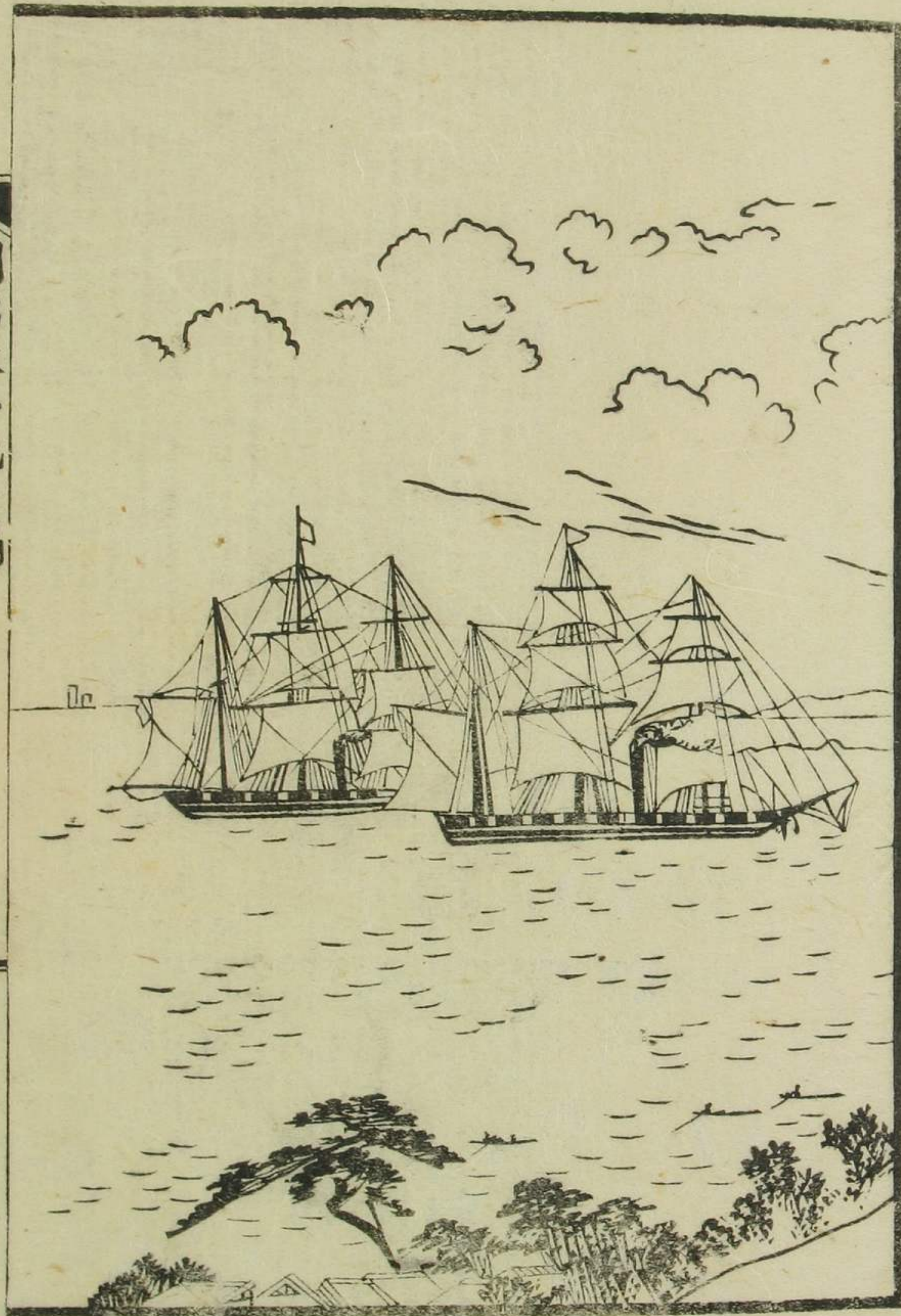
及び邏卒と指搦
此夜も賊兵襲
當所深堀との
名も邏卒の午
賊徒と竊り小牒
長崎の市中
又佐賀の舊藩
正義の士

縣令宮川房之其頃在京中なり
生と聞よりも急ぎ歸縣し及び一
崎へ迫らばきの所へあるや參事兵藤
原諫早大村平戸の士族等亦至
防禦の備へと做さふを縣下の老
々度大さあはば既より廿日の夜
く諫早口より乱入を志すの模様有
注進あり之は因て今參事等募兵

して防戦の策をめぐり居られど
来らむ次の日の午後四時頃
の鍋島の舊邸より士族凡四十
捕縛せり此徒を豫る佐賀の
合せし不意に縣廳を襲撃し
放火せんとの計策ありとぞ此時
は帆足清華と言ふ者あり最も
彼の前山氏と齊しく激徒の

暴動を深く憂ひ百方周旋尽力せし故佐賀縣下のうちよ於て神代といふ所は田居といふ士族等ハ順逆の條理と厚く辨へ賊徒は一味せざりしハ偏へし帆足が功ありと言ふ余はまに内務卿をとりめ海陸軍の將士等ハ何れも水路恙なく博多の浦に著艦せし各上陸し及び此地を以て本營と定め軍議決定し至りし是月廿日の午前八時正則ち兵と三道に分ち茨木

陸軍の少將等ハ一大隊の兵を率ひて田代口より進發し原陸軍の小佐が率ゆる一大隊の兵士を萩原且つ平等寺の両口へ分配し又本陣の守衛を一中隊の兵と残りて小笠原陸軍の大尉則ち之を管せりと言ふ余ハ官軍博多港へ着岸あまをと听くよりも賊徒ハ肥筑兩國の境に三ツ瀬越し斥候を出し或ハ士族等數十名福岡博多の中間を兵器を携へ出沒做まぬぞ街の風説囂し官軍着岸し及びてハ直し



内務卿及び
 海陸軍の將
 士等博多
 入港に



博多ノ襲撃せんと賊兵此ノ進むと唱へ或ハ賊軍三ツ瀬
越ノ来るとり報知り然ととも本営より彼ノ一中
隊備へーのそ其兵多うさるをめて僅う小弁候へ出せ
ども遠く兵士と進ませむ敵押来らば撃取らんと准
備最も嚴重ありーが賊徒も憚惑む所やりらん遂
ニ博多の本營までハ猥り兵と寄せざりたり此夜田代
口へ向ひー官軍ハ二日市ノ宿陣るー次の日田代駅ニ至
り茲にて敵情と探索するニ田代ハ要衝の地あるが故ニ

賊徒も這所ノ兵を置き今小も官軍寄せ来らば岩村
権令の例ニ任せ一擧之と追崩さんと片唾と飲て
俟かたりー本道よりー大軍の進み来れる
ありと萩原及び平等寺の両口よりも攻寄ると
其所へりりー賊徒等大つハ驚怖して一支へも支
へ得ず糧米彈藥言へば更あり雜具の類ハも残り
置き或ハ路次ニ打棄ると一の威嚇の子を散らす如く
我後且トと逃去るのみ是迄此地の土人等ハ賊徒の

暴威烈一々れば勢ひ己
の姿と示一居たり一
恭順の意を表一且一
頃福岡縣の士族等ハ
或ハ心と動クモ多
の權參事山根秀助と
各廳ニ召集シ懇ろ不利
くろざると説諭せり是

りろん決然朝旨の時
此青山根權參事より
小毛此一事ハ甚ど眷
の思ひやり因之博多
中を本營とふん致さ
族等何とも官軍の威
鋒と望める輩ら尠
此音沙汰ニ敬駕縮せ

月台太平記六編下

介程さげほどは佐賀城さがじょうに籠りこもし暴徒等ぼうとらハ斯く速くすみは
内務卿ないむしやうの許多あまごの官兵くわんぺいを引ひ俱ぐしく着港ちやくこうに至るいたる
とお思おもひ設まけぬ吏しあれど豫よて西郷陸軍の大將さいきやうりくぐんたいしやうを
始はじめめ鹿見島縣かみじまけんの士族等しぞくらも依い頼たりたる事こともゆ
其他ほか福岡長崎白川宮崎等の諸縣しよけんハ更さらあつ山口高
知ちの兩縣りやうけんもども稍同盟せうどうめい及び及び一いつれれバ必かなず應援おうえんする
べしと頻しばしばりし渴望かつぼうするまと雖なも朝廷てうてい曩なも諸縣しよけんに令まり
て万ま一いつ暴激無頼ぼうげきむらいの徒とありと妄説わうせつと相唱あひなへ人民じんと煽せん

惑まどするまとも必かなず方向かうかうを誤あらざるまやう注意ちゆういするまと
ゆいるまは依より各縣かくけんもとも令ま参事等さんじらうより厚あつく説諭せつご
のゆいりまるま依よりて物議ぶつぎ不平ふへいと生なぜま一いつれれ向むかひ忽たちち朝旨あそぢ
は遵したがひま一いつれれ今いまハ暴徒ぼうとと援えんするま者ものふく大おほく望のぞみ
を失うひま一いつれれ田代及び三ツ瀬越せせも出張しゆちやうをせま一いつれれ賊兵等ぞくへいら
が追々おひは逃飯にげいりて官軍くわんぐんの猛威もうい烈れつくま一いつれれ當ありま互たがまの
赴おもむきま注進ちゆうしんするま吏し頻しばしばりまなれま賊威ぞくい甚おほく衰おとろへまが
弁わ中ちゆうに死しを顧かへま猛勇もうゆうもま一いつれれ甚おほくまねま朝あま

日山の險阻に據りて敵寄せ来らば撃挫さんと逞兵
茲に數百人腕をさきりて待つ所へ二大隊の官軍
に近縣の士族等加り来りて忽ち一戦に及ぶと
言ふ其趣き我知らんとあつた次の編に記載するを
見ると

明治太平記六編卷之二終

第六大区八小区
本所外手町十八番地

著者 村井静馬

東京 書肆

版主 小林鉄次郎藏

第一大区六小区
日本橋通二丁目四番地

